アーティストステートメント

ペピト・マッタ

私は10年ほど前に絵画を始めた。

それは私のギルティープレジャーであり、唯一の例外、盲点である。
大抵の場合、私は「物質的」なものをつくらないようにしている。残余、その最小限の痕跡はない。とりわけオブジェやフェティッシュなものはない。アントロポセンの今、それは少し度を超えている。

絵画は、このやや偽善的なデリカシーを免れることはできずにいた。
それはデジタルになった。「非物質」。痕跡がなく、厄介ごとが少ない。
デジタル絵画の重さとは何か？それは数ピクセル。いいということにしよう。距離を置くと不思議なことが起こる。

不思議なことに、
いわゆる「人工知能」は
強く好奇心を駆立てたままだ
(「ナチュラルインテリジェンス」
と緑川雄太郎が上手く指摘するように、
ある者は自然/文化というとても非建設的な二元論を更新することを避けたがるかもしれない)。
そして、おそらくはわたしたちの種にとっての救いの道(ある者はここで、ガイア仮説の著者の変更に気づくだろう)は非常に知的であり、非常に無分別である。

絵画制作において、私は常にこの主題に直面してきた。
数時間かけて描く価値のあるものとは何か？
あなたは少しばかりクレイジーで、少しばかり注意散漫になければならない。
しかし、私は常にコラボレーションを愛してきた。
これは、私の全体的な実践の中心となっている（私は決して一人で制作しない）。
私のもうひとつのコツは（自分の迷宮は自分が撒いたパンくずの道で発明しなければならない）、常に自分を何かで囲むことだ。
それは生きていても、死んでいても、架空の仲間でも、問題ではない。
存在することの耐え難い重さを支えるもうひとつの方法。

Metapetsは、人工知能、より正確には神経システムとの対話として考えられている。「テキストからイメージへ」という原則のもと、この技術は、テキストの指示からイメージを生成することを目的としている。シンプルでまとまりのある文章の枠組みの中にいれば、その結果は非常に現実的である。この知性の理解を超えるテキストを入力し画像を生成することで、この新しい知性の形式の限界を試すことは興味深いことではないかと私は考えた。この「テキストの指示」という考え方に基づき、私は主に2つの音域を検討しました。

1つ目は、逆説的なもので、文章が長くなり、めまいがするほど長くなる過程である。

> 真珠のような肌の存在が、漠然とした海で空洞になっているとしたら、それは、爬虫類のように印刷された回路が、情緒的な物質に変容しているからだ、と求婚者は、空間が収縮するにつれて長くなるのを止めないこの夏の夜の暖かい光の中で、優しい表情で、まるで、別離の地平にいる私のもろい心のように叫ぶ

一方、もうひとつの方法は、コンポジションやモンタージュの要素を取り入れた、アルゴリズムのジェスチャーで構成されていた。指示はパラメータであり、言葉とイメージは呪文であった。

> 海
> 海　目
> 海　痒い　目
> 海　痒い　目　収縮
> 海　痒い　目　収縮　形
> 海　痒い　目　形のない　収縮　物質
> 海　痒い　目　形のない　収縮　物質
> 海　痒い　目　無定形の　収縮　物質　感情
> 海　痒い　目　無定形の　収縮　物質　感情　不揃いな
> 海　痒い　目　無定形の　収縮　物質　感情　愛
> 海　目　無定形の　収縮　不揃いな　感情　願望
> 海　目　無定形の　収縮　不揃いな　感情　願望　退廃　物質
> 海　目　形のない　収縮　感情　不揃いな　願望　退廃　手ざわり
> 海　目　無定形の　延長　感情　不揃いな　願望　退廃　愛
> 海　目　延長　無定形の　感情　不揃いな　願望　退廃　渇望　倫理
> 海　目　延長　無定形の　感情　不揃いな　退廃　倫理　渇望　予想外

より複雑なテキストやアイデアの連想を試みることでAIは驚くべき結果を作成した。私からすればこれらの詩的なグリッチは、夢あるいは妄想のように、機械の無意識のようなものを体現している。これらの創造は、シュルレアリストの芸術的実践の連続性を示している。それはもはや自分自身の内部の通路に関する問いではなく、人工知能、つまり人間の技術的な逸脱物の無意識を調査することに関する問いである。同じように、自動書記のプロセスと、AI固有の生成の形式との間には、明らかなつながりがある。それらはある種の、（人工知能ではなく）ナチュラルアンコンシャスから直接出てきたエクトプラズミックなキメラであり、心理学的形態学だ（NU＞AI）。私が楽しむ仲間がいるコミュニティを構成するため私が集めた仮説的存在の形態。ペットカフェ。

その後、これらのイメージを拡張するために、私はデジタルペインティングというメディアを使った。よってこれはAI/NUとの3段階のコラボレーションだ。テキストが指示され、プログラムとの対話からビジュアルを生成し、私が描き直す。この共作の形式は、生成的な偶然の遊びと同義でもあり、私自身の主観が溢れ出るものである。私は、機械が生み出すものをコントロールせず、グリッチに身を任せ、最終的にはそれらのバグから創造を試み、汚れに目を向け、AIの拒絶を演出する（結局ペットとは誰なのか）。デジタルペインティングはまた、新しいスケールで仕事することを可能にし、グローバルな姿だけでなく、よりミクロなビジョンも強調し、ある種のインフラ・メタバースのような領域と起伏をつくる。

これらの生命の形式は、私にとってはシュルレアリスムの視覚的創造物（例えばロベルト・マッタやヴィクトル・ブラウナーなど一非常にランダムに選ばれているだろう）とも共鳴するが、今日では別のトーンを帯びている。シュルレアリストたちが可能性の世界を開き、夢の国を探求しようとしたのに対し、これらのスペキュラティブな形式は、一般的に生物多様性が消滅した時には、キーキー言うようにいくらか奇怪だ。

私にとってこのシリーズは、人類の進化において、新しい生命体の孵化の可能性（コンピュータによる創造方法の進歩を通してか、バイオテクノロジーを通してか）が、すでに存在する生物多様性の崩壊と同時に起こるある瞬間を表している。このような意味で、人工知能や自然の無意識の形態が、私たちのコントロールや生存の範囲外で、イメージやアートを生み出し続ける可能性があるという仮説に従って、私は「Art after human」展のためにこのシリーズを提案する。

« artist's statement »

written by pepito matta/thomas vauthier

for the exhibition of Metapets at the Museum Of Contemporary Art Fukushima

on the invitation of Midorikawa Yutaro

published on 2023.03.11